

# ネコの写真館

川村優理

*A CAT PHOTO STUDIO*

*Story & Photo Yuri Kawamura*



1

「結婚式の間、ロビーで待っていて。たいくつだったら、近くに本屋さんの通りがあるから、行ってみるといいわ。えりも、もう五年生だし、大丈夫。たしか、すずらん通りっていう名前だったはずよ」

お母さんは、えりを一人残して、ドアの向こうに行ってしまうました。

夜のホテルは町の灯りをガラス窓に映し出し、シャンデリアもいっそう輝いてみえます。

「つまらないなあ」

今夜は、いとこのまきさんと、えりが四年生のときの担任だった鳥井先生の結婚式です。

まきさんと鳥井先生が出会ったのは、えりがぎっかけでした。家庭訪問にやってきた鳥井先生がインターホンを鳴らしたとき、玄關のドアを開けたのが、たまたまえりの家に遊びにきていたまきさんで、それから二人は恋をしたというわけです。

だから、えりはおしゃれをしてみました。黒いビロードのワンピースを着て、髪にも黒いヘアバンドをつけました。黒いピカピカ光るエナメルのかくもはいています。

でもー。

今夜の結婚式に、えりは出席できなくなってしまいました。

鳥井先生の知り合いが一人、増えることになって、その人の分のお料理の予約をしていなかったというので、代りに、えりが外で待っていなければなりません。

えりは、ロビーの大きなソファにどしんとすわりました。黒い革のソファは、見た目よりずっとクッションが良くて、えりの小さいからだはずんとしずみこんでしまいました。

ほとんどあおむきになると、天井にはたく

さんの四角い鏡がはめこまれています。その一つずつに、ホテルのロビーのいろいろな物が小さく映し出されてきました。

ーポーンー

大きな音にふりむくと、ロビーには古い時計がありました。時計の振り子箱には分厚いガラスがはまっていて、赤と金色と黄色い線で目玉のような丸が描かれています。その中を金色の振子がゆっくりゆれていました。振子の後ろには、金色の文字がありますが、たぶんそれは古い英語で、えりには、ちっとも読めません。

時計はぎーっと音を立て、七時をしらせる、二番目の鐘を打ちました。

ーポーンー

えりは、ちよつと町に出てみることにしました。

「遠くに行かなければ帰ってこれそう・・・」

ビルの角を三つほど通りすぎたところに、「すずらん通り」と書いた白い立て札が立っていました。本屋さんがずらつと並んでいます。(右に行こうかなあ、それとも左)

立ち止まった曲がり角に、石造りの古いビルがありました。壁には、二つの首の竜や、白鳥や、背中に時計をのせたヤギの絵が彫らている、丸い電灯に黄色いあかりが灯っています。

一つの窓のカーテンが開いています。

(二こも。本屋さん?)

えりはせのびをして、ガラス窓の中をのぞきこみました。

と、・・・「あぶないっ」・・・

走ってきた自転車にぶつかりそうになって、えりはとびのきました。えりと同じくらいの年の、男の子が、ぴよんと自転車からとび下りました。

「ごめんね、超急いで。あれ?子ネコ?いっしゅん、女の子に見えた」

(ネコ・・・?)

えりの影が、外灯の灯りの下で長く伸びています。影には細いしっぽがありました。

「ネコはあんまりうるろしない方がいい。」

最近ネコが消えるんだって、このあたりで」

そういうと男の子は、自転車にまたがり、さつきえりが歩いてきた道をホテルの方向へ、大急ぎで走ってしまいました。

風がふわりと舞い上がって、パーミントキャンディーのおいがしました。

くるりと一回りしてみましたが、たしかに。えりは、小さい黒いネコになっています。

街に細かい雨が降り始めています。

さつきの石作りのビルのドアに、

「ネコの写真館」

えりは金色の文字を見つけました。

ドアが静かに開きました。

「いらっしやい。さあ写真、とってあげましょう」

カメラをもってそこにいたのは、子どものヤギでした。

「一枚目はただです。二枚目からは料金をいただきます」

子ヤギは楽しそうに笑いました。

3

「ここに来たネコの写真。ほら、みんなすてきでしょう？」

壁に、ずらりとネコたちの写真が並んでいます。

「きみの写真も、さあ、とってあげるよ」

カメラを向けられたとたん、えりは、動けなくなってしまいました。

「僕はネコの写真を集めるのが大好き」

そのとき、写真館のドアがいきおいよく開いて、えりより少し大きい、白いネコがとびこんできました。

「逃げろ」

えりは、はじかれたように逃げ出しました。 が、写真館のドアはもう開きません。

壁は鏡のようにいくつものドアを写し出しえりと白いネコを取り囲みました。

本当のドアは一枚のはずです。でも、もうどれが本当のドアなのか、わかりません。

子ヤギは、ふふっと笑いました。

「さ、写真をとらせてもらおう。一枚目は無料。二枚目からはお金の代りに永遠の命をいただきます。僕の写真としてね」

白いネコが、子ヤギにとびかかりました。カメラがガシャンと床に落ちて、写真館がぐらりとゆれて傾きました。

4

「えり！どこにいるのお」

お母さんの声が聞こえます。

「お母さん・・・」

「えり。時計の中で遊んでいたの」

気が付くと、えりはホテルのロビーの時計の、大きなふりこ箱の中にいました。

ゆるる振子を押上げて、えりは時計の外にはい出しました。

ペーパーミントキャンディーのにおいがします。

「さ、この間から出ておいで」

さつき、道でぶつかった男の子が、ふりこをささえていました。

「結婚式。ぼくが来るって言ったから、代りに外に出てくれたんだってね。でもお料理。たくさんあるよ。えり

ちゃんも中に入っくいんだって」

男の子は、鳥井先生のおいだそうです。

お母さんが、時計を覗き込んで言いました。

「あらあ、七ひきの子やぎの絵本に出てくる時計みたいねえ」

そういえば、お話では、七匹のうちの小さい一匹が、時計の中にかくれたのです。

ふりこ箱の奥の絵に、ほら、一匹の子ヤギが描かれています。

えりは驚いて、男の子を振り返りました。

「ネコの写真。はがれちゃったあれね」

男の子は、ホテルのロビーの天井をちらっと見上げました。

高い天井の一枚ずつのガラスに、ロビーにいる人たちが映っています。お母さんも、男の子も、えりも・・・、それから、さつきまで写真になっていたネコたち。

時計の振子は、そしらぬ顔で、ゆっくり動き続けていました。

—ポーン—。

時計がぎいっときしんで、七時の時報が鳴り終ったようです。

天井のガラスに、オオカミの写真が一枚、はめこまれていることに、えりは気が付きました。たぶん、あれが「七匹の子やぎ」にでてきた悪いオオカミです。写真館の子ヤギは、オオカミの写真もとってあったようです。

広いロビーの、時計の反対側に置かれた古いガラスケースには、さつきヤギの子どもがもっていた、りっぱなカメラがおさめられていました。

「は、はじめまして。じゃなかった、どうぞよろしく。」

男の子が、キャンディーを一本、えりに差し出しました。

えりのもらったキャンディーは、ペパーミントではなくて「ストロベリー・ミルク」の香りでした

(おしまい)